

教育勅語暗記暗誦の経緯

鈴木 理 恵

Survey about the memorizing of
Kyoiku Chokugo (The Imperial Rescript on Education) III

Rie SUZUKI

はじめに

前稿において、大正期から昭和期にかけて小学校生活を送った人々の75%が、当時、教育勅語を全文暗記していたことを、アンケート調査によって明らかにした¹⁾。全文暗記した人の割合を年代別にみたところ、57-65歳層（1939-1931年生まれ）で66.2%、66-70歳層（1930-1926生まれ）で74.9%、71-75歳層（1925-1921年生まれ）で78.8%、76-80歳層（1920-1916年生まれ）で75.3%、81-85歳層（1915-1911年生まれ）で76.2%であった。児童による教育勅語の暗記は、遅くとも大正期半ばには普及していたといえる。明治期から大正期前半にかけて小学校時代を過ごした人々を対象としたアンケート調査には限界があるため、児童による教育勅語の暗記暗誦がいつごろ普及したのかということは明らかにできなかった。そこで本稿では、明治・大正期の教育関係雑誌²⁾などを使いながら、児童が教育勅語を暗記暗誦するようになった経緯を考察する。

1. 教育勅語発布直後——明治20年代

中村紀久二氏は「教育勅語の暗誦・暗書は一九〇〇年前後において、神奈川・福岡のほか、新潟市、長野県、茨城県でも行なわれることとなり、明治四〇年代初頭にはそれが全国的規模に拡大されるに至った」³⁾と、また山中恒氏は「渙発から十年後にして、教育勅語は早くも九九並に教室へ持ち込まれ、子どもたちがやみくもに暗記させられていた」⁴⁾と指摘している。両氏は学校における教育勅語の暗記は明治33（1900）年ごろ始まったとしているが、実際はそれ以前からおこなわれていた。

明治23（1890）年10月30日に発布された教育勅語は、その謄本が11月3日天長節より翌24年2月11日紀元節までの期間をピークに明治24年中には全国約3万校に下付されたといわれている⁵⁾。明治24年6月「小学校祝日大祭日儀式規程」によって「御真影」への拝礼と教育勅語「奉読」が学校儀式の重要な柱となった。同年11月の「小学校教則大綱」で修身は教育勅語の旨趣に基づくことが規定され、同年12月の「小学校修身教科用図書検定標準」で「小学校教則大綱」に適合した修身教科書を編纂すべく規定された。これによって、教育勅語の旨趣に即した徳目主義の修身教科書が普及した。修身教科書が、勅語に即して徳目を配列したり、勅語の各節をそのまま各課の題目として構成するなど、教育勅語に準拠して編

纂された。また、「勅語の全文を修身教科書の巻頭に掲げて常に誦読することを求めているものも多数刊行されていた」⁶⁾。教科書を通して勅語を読むことは勅語発布以前から勅語普及の方策として考えられていたようで、明治23年9月26日芳川顕正文相が閣議に提出した「徳教ニ関スル勅諭ノ議」に「聖意ヲ奉体シ務メテ徳教ヲ普及拡張セシムルノ方法」として「教科書ノ巻首ニ并スルニ勅諭ヲ以テシ、臣民ノ子弟ヲシテ日課ヲ始ムルゴトニ之ヲ拝誦セシメ、自然聖意ノ在ル所ヲ脳裏ニ感銘シ、以テ徳教ニ風化セシメントス」⁷⁾と記されているのは注目される。教科書の巻首に載せた教育勅語を日課のはじめに児童に「拝誦」させることによって、その趣意を児童の「脳裏ニ感銘」せしめることが期待されている。ただし、教育勅語の暗記暗誦については明記されていない。

当時は教育勅語の普及は教育者の力に待つところが大きいと考えられたようで、教育者に対して勅語を読むことや趣旨実践が奨励された。芳川文相は教育勅語趣旨貫徹のために「教員タルモノ須ク道義ノ本領ヲ保チ毎事躬行実践以テ行為ノ儀範ヲ示サ、ルヘカラス」⁸⁾と述べ、教員の役割の重要性を説いた。明治23年11月、帝国大学教授内藤耻叟は「定メテ知ル、天下教員諸子モ、皆欣躍抃舞シテ、到ル所称道掲揚、之ヲ幾千万ノ子弟ニ伝テ、以テ我邦ノ典謨トシ、我邦ノ経書トナシ、之ヲ日夕拝誦シテ、以テ服膺遵行、惟日モ違マアラサランフヲ」⁹⁾と述べている。東京府尋常師範学校教頭矢島錦蔵は、蜂須賀知事筆の教育勅語を「写真に縮写して各人常に懷にし以て朝夕奉読するこそよけれ」という勧誘状を府下の小学校長に宛てて出したという¹⁰⁾。明治27(1894)年9月5日発行『教育時論』338号では「勅語の御旨趣は小学教員の実践を第一」(11頁)とすると、明治31(1899)年4月15日発行『教育公報』210号では「教員たるもの其人を得自ら勅語の標本となり材料の主人となり」(36頁)と、教師に児童生徒の模範となることを求めている。

実態はどうであったのだろうか。正宗白鳥(明治12年岡山県生まれ)は明治21(1888)年に小学校高等科に入学し、明治25年に卒業している。「教育勅語は、私など小学生として暗誦させられた。今なおすらすらと朗吟し得られるくらいである。私は記憶がいいと云うので、教師から教えられた勅語の解説を教壇に立って口真似させられたこともあった」¹¹⁾というのは、高等小学校での経験であろう。山川均(明治13年岡山県生まれ)は明治20年に尋常小学校に入学し、4年生の天長節から校長による教育勅語「奉読」を聞き始め、「意味は分らぬままに、ともかく「チンオモウニ」から「ギョメイギョジ」まで、いつのまにか暗記してしまった」¹²⁾という。生方敏郎(明治15年群馬県生まれ)は「明治二十四年頃、畏き辺りから全国の小学校に御真影を教育勅語と共に下賜された。そして三大節の祝日の式を開く初めに、校長は忝しく勅語を朗読するのが例になった。……私たちはいつしか教育勅語を暗記し、どこでも暗誦出来るようになった。おぼろげながらその意味も分った」¹³⁾と書いている。和辻哲郎(明治22年兵庫県生まれ)は「わたくしの村の尋常小学校は、『君が代』をさへ唱はない学校だつたのであるから、御真影なども勿論なかつた。しかし教育勅語の捧読は聞いた覚えがある。小学校の間に勅語の文句もおのづから耳慣れたものになつてゐたやうに思ふ。しかしその文句を教科として用ゐることはなかつた。無論、その文句を暗記させられたりなどはしなかつた」¹⁴⁾と書いている。

明治30年代初めまでに小学校時代を過ごした正宗・山川・生方・和辻のうち正宗を除く3人に共通するのは、校長による勅語「奉読」を聞いているうちに教育勅語が「耳慣れたもの」になり、「いつのまにか暗記してしまった」のであって、教育勅語の暗記を学校側か

ら奨められた、あるいは強制されたわけではなかったという点である。

しかし、学校によっては早くから児童に勅語の暗記をさせていたところもあったようで、石川県江沼郡小学校は明治26（1893）年に「勅語ノ主旨ヲ貫徹スルコトニツキ講究実験シタル事項」として「児童稍文字ノ知識アルニ至レハ勅語ヲ諳記セシムルコトトナス、然ルトキハ勅語全体ニ就テノ説話ヲナスニ当リ大ニ其便益アルヲ覚ユ」¹⁵⁾という報告を行っている。いっぽうで、石川県鹿島郡小学校では避けるべき四項のなかに「勅語捧読ハ余リ頻繁ニナスヘカラス、捧読ノ度数頻繁ナレハ自然敬意ヲ損スルノ憂アリ」「教師生徒共ニ常ニ勅語ヲ称フヲ慎ムヘシ、妄ニ勅語ヲ口ニスレハ自然敬意ヲ損スルノ憂アリ」¹⁶⁾を入れており、勅語を唱えることに対して慎重な姿勢が窺える。また、明治27年の「熊本県庁に於て召集せる、高等小学校長会議の知事の諮問に対する答申」によれば、次のようにある。

教授上に於ける方法は一、二年生に勅語の読方及び大意の解釈をなさしめ、三年生は少々精に入り四年生に至ては章句を分ちて、愈々精しく、且此間古人の言行出来事等を例証して、会得せしむるを務むと雖も、彼の勅語を諳誦せしめ又は印刷物として生徒各自に渡すが如きは自今大に取締を加ふべし¹⁷⁾

生徒に暗誦させることを「自今大に取締」まるようにとあるから、当時の熊本県にも生徒に勅語を暗誦させていた高等小学校があったのかもしれない。勅語印刷物の扱いに関しては、すでに明治24年12月に注意を呼びかける記事「勅語謄本の取扱を論ず」が『教育評論』40号に出ていた。米倉三育は、「新聞雑誌は競ふて之を登載し、或は附録となし或は一枚摺となして天下に散布したり、随て勅語衍義勅語義解等の書が続出するのみならず、某々県の如きは勅語を印刷して生徒に配与するに至る」ことによって「負薪の婦牧牛の童より津々浦々の媼翁に至るまで聖意の至深なるに感奮」したが、その反面「往々彼印刷物が教師の机辺に散乱し破損」（5頁）しているような状況を呈していると指摘している。

2. 勅語の旨趣貫徹の問題——明治30年代

明治27（1894）年発行『教育時論』338号「勅語の旨趣を貫徹せしむる方法如何」と題した文章のなかに次のようにある。

去歳地方官会議の節、畏くも我天皇陛下には、地方官に臨みて勅語の旨趣実行の如何を尋ねさせ玉ひたるに、各地方長官は、殆んど御答申上ぐる言葉もなく、冷汗背を濡せしことは、当時の新聞紙に喧伝せし所なるに、今日に至る迄、未だ是ぞと云ふ実行方法の立ちしことをも聞かざりしは、識者の遺憾とする所なりし……（11頁）

このように明治20年代から教育勅語の旨趣貫徹がなされない状況を批判する記事が出ていたが、明治30年代になるとその傾向はいっそう強くなった。

明治30（1897）年発行『教育時論』429号「教育勅語の聖旨の貫徹如何」と題した記事においても、明治27年記事で取り上げた地方長官と天皇とのやりとりに言及して「勅語の御精神の未だ貫徹するに至らざるを表言せしもの」（10頁）と批判し、貫徹のために教育者の覚悟を促している。

明治31（1898）年発行『教育公報』210号「教育に関する勅語の主旨の実際に行はるゝ状況」において、鈴木亀壽（在栃木県）は学校で教育勅語の主旨徹底がなされていない原因として、修身科の教授が未熟な准教員や無資格の雇教員によって行われていることと規定の教科書によって説明的方法がとられていること、祝祭日等での訓戒が学力年齢の異なる児童を一室に集めておこなわれているため適当な感情を喚起できないこと、をあげている。

そのようななか成績を上げるために種々の方法を執っている学校の例を列挙しているが、その最初に「修身時間の始めに高等科一学年以上をして各自の教室に於て起立低頭謹んで一斉に勅語を捧読せしむ」(36頁)というものがあげられている。

明治31年5月15日発行『教育公報』211号は神奈川県において議定した「勅語の御趣旨を最も明確に尋常小学校在学児童に会得せしむる順序方法」をあげている。それによれば、1・2年生では勅語の語句を挙げずとも一々実践を促していくこと、3年生では勅語中の語句を挙げながら実践を促し語句と徳行をむすびつけていくこと、4年生では「勅語の印刷物数十葉を学校に備付け時に之を各生徒に貸付し最も敬意を表して之を奉読せしめ遂に諳誦し得るに至らしめ以て他日社会に出てたる後遵奉すべき道德上標準に備へしむ」(41頁)とある。尋常小学校4年生で教育勅語を暗誦させて将来に備えさせようとしている。

明治31年5月25日発行『教育実験界』1—5「教育勅語につきて」と題する文章において、静岡県志太郡静濱高等小学校渡邊金作は佐藤少将の話を紹介している。佐藤は日清戦争当時歩兵第十八連隊長の立場にあった際、六週間現役兵の学科試験に教育勅語を書かせたところ、正しく書き得た者がひとりもおらず、中には白紙で出す者さえあったため、「小学校教育に従事すべき師範学校卒業生にして、教育者の拳々服膺すべき教育勅語を書し得ざるは実に畏れ多き次第ならずや」(9頁)と彼らの不心得を論じたという。この話を聞いた渡邊は「惟ふに教育勅語の煥発せられしより既に七載有余を経過せり、生は吾人教育者中亦当時の卒業生と同じきもの多からざらんことを祈りて止まざるものなり」(9頁)と書いている。このような問題意識からか、渡邊は高等小学校4年生の書き取りの練習として勅語の謄写を課した。その成績が不良だったために、次に勅語を読ませたところ通読できない者が多かったという。渡邊は、この原因について次のように述べている。

教育勅語は生徒用修身書毎巻の首に掲げらるゝも、尋常小学校に在りては勿論高等小学校に在りても、当該修身書の教授にのみ注意して、曾て勅語の読方を授けず、生徒の勅語奉読に接するは僅に大祭祝日の儀式(本県にては紀元節天長節の二祝日のみ)、若くは始業式閉校式免状授与式等に於て、学校長首席訓導の奉読を敬聴するに止まるのみ、其生徒の奉読し能はざる誠に所以ある哉と。(9頁)

そこで渡邊は1週2時間の修身科の時間に勅語を読んだ。その方法は、生徒が着席して静粛になるのを待ち、修身書を机上に「正しく」置かせ、一同起立ののち修身書をとらせて巻首の勅語に注目させ、敬礼をさせ、生徒に頭を垂れさせた状態で教師による「奉読」を聞かせるという儀式だったものであった。ときに「優等生」に読ませることもあった。2、3カ月で効果が現れ、全校生徒中教育勅語を読めない者はほとんどいない状態になったという。渡邊は児童生徒が勅語を読めない状況を問題視して、読めるようにすることに目的を置いていたのである。

明治32(1899)年に長野県北安曇郡校長会において「教育ニ関スル勅語ノ精神ヲ貫徹セシムル方法中勅語講読ニ関スル規定」が定められた。それによると、尋常4年生から講読を始め、4年生のうちに勅語の暗誦と筆記を終えること、高等4年生のうちに暗書を終えることを規定している。さらに同県松本小学校において、明治33年4月第一週の尋常4年生修身科において、教科書巻首の勅語を「捧読」してその解釈を与えることとした。「勅語拝読ニ関スル作法」について、「敬虔ノ心ヲ持シ顔色ヲ整」え、「直立シテ踵ヲ接シ両手ヲ垂レ指間ヲ密接シ掌ヲヤ、前方ニムケ小指ヲ股ニ付」して「私語外見等ハ勿論痒キモカカ

ズ痛キモ抑ヘサルノ覚悟」すべきことを求めている。¹⁸⁾

明治33（1900）年2月19日第14議会において、衆議院議員鈴木重遠・安部井磐根などが教育に関する建議案を提出した。諸氏は「全国ノ諸学校ニ於テ奉読スルモ、国民全般ニ及バズ」として「之ヲ国民一般ニ奉セシムルノ方法ヲ訓示セラレンコトヲ望ム」（2頁）と政府に要望した。これに呼応して、明治33年2月25日発行『教育時論』535号は社説「教育勅語の普及徹底」で、当時の実態を「小学校を卒業し、又は其の高等二年より、中学校に入れる生徒にして、勅語の大意をすら語ること能はず、否、其の読方も覚束なく、否、々、勅語と曰ふものは、学校に於いて、校長が祝日に奉読するを聞けるのみと答へし生徒も往々ありたる由」（3頁）と批判し、学校が本源となって国民一般に普及徹底をはかるべきだとの考えを主張している。

明治34（1901）年の茨城県における第二回連合教育会で審議されてまとめられた「教育に関する勅語の主旨を一層普及せしむる方法」によると、「学校に於て注意すべき要項」15項目のなかには、三大節のほか入学・卒業式、修身教授、講堂訓話の時に勅語を「捧読」して児童に謹聴させること、修業年限間に一回以上は特別に勅語を教授すべきこと、各教科目用書・通信簿・児童心得等の巻首に勅語を付記すること、小学校に勅語謄本以外にも勅語の額面・掛図を備え置くこと、児童入学時に勅語写書を与えて携帯させるか学校に備え付けたものを貸し、卒業に際しては勅語写書を与えて、「聖旨」を遵奉させるように務めること、「勅語教授の際は児童に其の文辞語句を暗記暗誦せしめ特に勅語と云ふ義及勅語下賜の年月日に注意せしむること」、「児童に勅語を記誦せしむる時は如何なる場合に於ても必ず其の容儀作法を正しくせしめ横臥歩行の際に於て猥に戯誦するか如きことなからしむること」などがあがっている。¹⁹⁾ 児童の視聴覚に訴えるとともに、児童自身に勅語を暗誦させて普及させることが目指されている。

教育勅語の普及徹底が問題となるなか明治35年に久津見蔵村は次のように書いている。

（教育勅語は——引用者註）子供には能く分かるかどうか、甚だ請合れない。寺の小坊主が口柏子に乗つてダダブダブと経文を読む。それを聞くと誠に傑いと感じる。けれども彼れは唯読むだけだ。何にが書いてあるか一向知らない。小学校で子供が其可愛い口で御勅語を捧読するのは、之れと同類ではあるまいか。それでは何にもならぬ。如何に尊い教でも子供の頭脳へはいらなければ、何んの役にも立たない。²⁰⁾

当時、小学生が教育勅語を読むということが、久津見の批判を招く程度に広まっていたことを窺わせる。

明治35（1902）年10月25日発行『長崎県教育雑誌』123号の論説「如何にせば徳育をして効果あらしむべき乎」において、櫻井清（佐賀）は、「勅語は修業年限の終りに於て之を課し、以て既往に学べる智識を統一し帰結し、我国民の道義は畢竟、勅語を奉戴服膺するに外ならざることを、深く感銘せしめざるべからず、勅語の文章は悉皆暗誦せしむべし、而して尋常科は半ケ年、高等科は一ケ年を以て之に充つ」（10頁）と意見を述べている。

明治39（1906）年11月15日発行『教育時論』777号「勅語奉読式」では、「驚くべきは同学校（慈恵医院医学専門学校——引用者註）は専門学校なれば、入学者は中学校或は同等の学校を卒業せしものなるに、教育勅語の素読すら充分に為し能はざるもの少からずとのことなり」（34頁）と書かれ、専門学校生が勅語を読めないことが問題視されている。

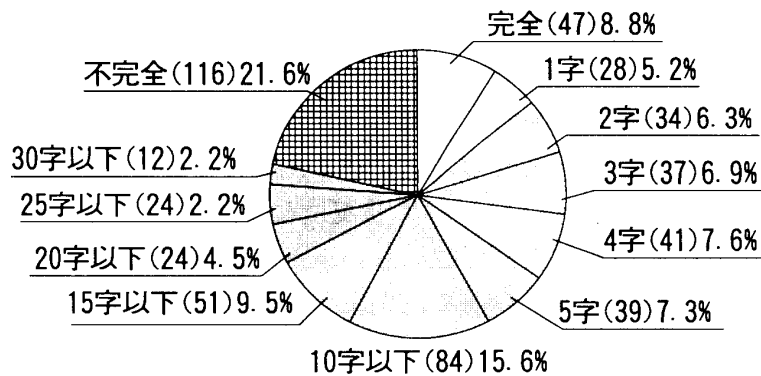
3. 暗記暗誦の普及——明治40年代

明治40（1907）年6月5日発行『教育時論』797号「教育勅語に就て」では、「小学校、中学校、高等女学校のみならず、師範学校に於いてすら、教育に関する勅語は、敬遠主義を以て扱はるゝ」は遺憾であると述べ、「此等学校の卒業生にして、勅語の聖旨の了解は俶置き、誦誦は勿論、謄本に向ひて、之を読むことすら出来ざるものある」（45頁）と嘆いている。明治41（1908）年6月3日発行『教育界』7—8「教育勅語に関する注意」では「教育勅語を視ること余りに高きに失し動もすれば之を高閣に束ねて、障らぬ神に崇りなしの敬遠主義に陥れるものなきや」（8頁）と、明治41年9月3日発行『教育界』7—11「教育勅語につきて」でも「聖意ある所を忘れ、之を高閣に祭り上げ、儀式一片の捧読文たらしめんとするの傾向なきにあらず」（5頁）と書き、教育勅語敬遠主義を批判している。当時の牧野伸顯文相も次のように述べている。

この勅語は現にいつれの学校に於いても極めて莊嚴に尊崇せられ居れども、動もすれば、之を尊崇するの余り、徒らに形式に拘泥して、其の御趣意の籠れる内容の教訓に至りては、未だ充分に一般に徹底せず、従つて児童が学校以外に於いて、朝夕起居眠食の間に、実際に之を遵奉実践するの觀念確かならず、此を以て児童が一たび学校を去るに及びては、在学中祝祭日其の他に於いて、⁷⁷屢々拝聴したる勅語は、卒業と共に忘却し去りて、極端にいへば、全く關係を離れたるものゝ如く思惟する者すら多少なきにしもあらずといふ²¹⁾

牧野文相はこのような認識の下に、明治40年5月に開かれた師範学校長会に対する諮問の第一項として「小学校児童をして卒業の後永く教育勅語の旨趣を奉体実践せしむべき適當の方法如何」をあげた。答申では、小学校卒業後勅語の趣旨を實踐させるためには「在学中に聖旨の存する所を十分に会得せしめ且聖旨に基きたる良習慣を訓練」する必要があるとの認識に基づき、そのための具体的方法として第一に「小学校在学中に児童をして聖勅の誦誦に熟達せしむる様教育すること」、第二に「聖勅の大体及各徳目につき其の趣旨を發揮するに足るべき適當の歌詞歌曲を文部省に於て撰定し之を普く各小学校に於て教授せしむること」、第三に「小学校の最後の一学年に用ひしむべき修身書は特に聖勅の衍義を以て之に充て且其の装釘を堅牢優雅にして卒業後も永く之を保存し生涯遵守すべき經典となさしむること」、第四に「修身教授及一切の訓誡、訓話等は成るべく聖勅の語句に帰着せしむること」があげられている²²⁾。この答申内容は、9月に普通学務局長から各地方庁にあてて通牒が出されて、実施が求められた²³⁾。明治41年4月に尋常小学校の修業年限延長によって六年制義務教育が施行されて以来、明治末にかけて、就学率が98%に、通学率も8割を越えるようになった。このような時期であったからこそ、本通牒は子どもたちへの教育勅語暗誦の普及に大きな役割を果たしたと考えられる。

当時の実態を窺わせる資料がある。敦賀高等小学校長福島治三郎は、明治40年11月25日発行『教育時論』814号に「勅語の暗誦と暗写」と題して自らの学校で行った調査結果を報告している。「如何にして聖旨を児童に貫徹せしむべきか、其方法や幾多あるべしと雖、聖勅の内容を理解せしむると同時に、之が誦誦と暗写とに熟達せしめ、以て彼等をして造次顛沛も忘れざるに至らしむるは亦適良なる一方法たるべし」（25頁）と考えて、同年10月30日の「勅語御下賜記念日」に同校全児童（欠席者を除く）537名に勅語謄本の行数・字数に準拠した罫紙を与えて勅語を暗写させたところ、図のような成績になった。



註1) 字数は誤字脱字の数を示す。

註2) () 内の数字は児童数を示す。

図 敦賀高等小学校児童教育勅語暗写成績

「誤字脱字あるもの三分の二を占め、五分の一は聖句を脱し或は誦誦の境に達せざるものにして、完全に暗写し得たるもの纔に四拾七名なり」（25頁）という不成績は、暗写を子どもたちに抜き打ちに課したためのもではなかった。「予て児童に誦誦暗写の練習を命じ、其後数度誦誦の程度を検し臨写の如何を閲したる」（25～26頁）結果の不成績であったという。そのため福島は「教師は教授訓話によりて児童に聖勅を同はしめ、彼等の深き感銘より自然に誦誦暗記となるを期するの外、常に之を謹読謹写せしめて屢次其の成績を考し、更に十月三十日には必ず全児童に之を暗写せしめ、以て彼等の在学中は勿論生涯を通じて牢乎として抜くべからざる條規たるに至らしめむことを切に要望して止まざるなり」（26頁）と述べている。常に教育勅語を読ませ書かせ、さらに10月30日には暗写させることによって、教育勅語が子どもたちの生涯の条規となるようにしむけることを提案したのである。ただ、「器械的の誦誦暗写を強ひて徒らに形式に流れ実際に薄く、児童の行為に何等の影響を与へざる弊に陥るべからざる」（26頁）ように戒めている。

明治42（1909）年11月15日発行『教育時論』885号「詔勅捧読所感」には、沢柳前文部次官のことばとして、「今日まで此勅語の御趣旨が如何に奉戴せられ、如何に実践躬行せられたかといふ事を考へて観れば、尚ほ大に奮励努力しなければならぬと、痛切に感ずるものである。……又或人は朝夕この勅語を奉読せしめようとし、又或県では小学校の生徒をして、悉くこれを暗誦暗書せしめようとしてをる、苟くも師範学校の卒業生として、完全に教育勅語を奉写することが出来ぬといふは遺憾のことである」（24頁）とあるが、形式的な暗誦については「それを以て足れりとする事は出来ぬ」（24頁）としている。

明治43（1910）年5月「師範学校教授要目」、明治44（1911）年7月「高等女学校及実科高等女学校教授要目」および「中学校教授要目」（改正）で、教育勅語について「勅語ノ全文ニ就キテ丁寧慎重ニ述義シ且之ヲ暗誦暗写セシムヘシ」と定められ、師範学校や中学校・高等女学校における教育勅語の暗誦暗写が義務づけられた。また、明治43年3月発行の第二期国定修身教科書では、教育勅語を児童に浸透させるための改訂がなされた。すなわち、第一期の修身教科書では尋常小学修身書第四学年・高等小学修身書第二学年・同第四学年の巻末に教育勅語の全文（傍訓なし）をのせていたが、第二期においては尋常小学修身書巻四の巻首に勅語の傍訓付き全文を載せ、巻五と巻六のそれぞれの巻首には傍訓を省いた勅語を載せた。また、第一期修身教科書においては勅語の意味説明がなされていなかったが、第二期では尋常小学修身書巻六の最後の三課が勅語の大意にあてられた²⁴⁾。

上記のような暗記暗誦普及の諸施策を学校現場に徹底させるのに一役かったのが視学制

度であった。明治44年8月1日発行『内外教育評論』5－8誌上の一教員の報告によれば、学校に一学期に一、二回の視学巡視があって、視学の多くが教育勅語の暗記暗誦の考査をしてその成績で学級を判定するので「浅薄無定見なる教育者は、畢生の努力と忍耐とを以て生徒に強制すること当然に有之、生徒も亦汗を流して之に従ふ、能はずんば放課後の練習となり、遂に怒声と変じ、嘲罵と化す」（17頁）といった状況になったという。同誌上で三浦修吾も「誦誦させよと、上よりの命があると、思想のない下々の教員は、何事をさし措いても先づ誦誦させることを務め、郡視学などの前で、児童が立派に誦誦することが出来れば、それで吾が事成れりと思ふやうになるものである」（15～16頁）と述べている。また、明治44年7月1日発行『内外教育評論』5－7誌上で佐々木吉三郎は、「師範学校長とか、視学官といふ御方々が突然巡視された時に、生徒に勅語を書かして見たところが、余り出来か宜しくなかつたと云ふ為めに、非常に叱つたりなんかする事もあるさうで、さて、叱られて見ると寔に申訳がない事であるから、小学校では随分苦心して注意して居るやうである」（16頁）という現状を書いている。昭和5（1930）年に発行された『修身訓練の諸問題』（大正12年初版）のなかで佐々木秀一（東京高等師範学校教授兼主事）は「曾つて勅語の暗誦が同時に御趣旨の徹底であると解する人が多くあつて、例へば、県或は郡の当局の人々も学校視察の折にはその所管部内の学童に勅語の暗誦解釈等を試みその結果に依つてこの御趣旨の徹底して居るか否かを定めようとした人もあつたとかで、随分喧ましい議論が交換せられたことがあつた」²⁵⁾と、過去を振り返っている。「誦記誦誦の如何によりて学校の全般をトせんとする」²⁶⁾視学や校長がいたために、教師たちが児童に教育勅語を暗記暗誦させようと躍起になっていた当時のようすが窺える。

4. 暗記暗誦をめぐる論争——明治末期

小学校・中学校・高等女学校・師範学校において教育勅語の暗誦や暗写が課せられるようになると、暗記否定論が登場すると同時に、暗記是認論者でも問題の在処は児童生徒が勅語を暗記していないことではなく、暗記のさせかたに移っていった。

明治44年6月から8月にかけて『内外教育評論』誌上で教育勅語の暗記暗誦が論争された。論争の仕掛け人は同誌主筆の木山熊次郎であった。木山は「吾輩が近時頗る寒心に堪えない事は、頻りに教育勅語及び戊申詔書の誦誦暗写が勧められ、既に発表せられた師範学校や高等女学校の教授要目には、之を明記せられてある事である。当局者の熱心には感服するが……此の如きは、真に聖旨を体得せしむる所以でないと思ふのである」²⁷⁾と問題を提起した。「十年位昔から小学校で八釜敷教育勅語を教へ暗記させた学校もあり、又他方には然らずして、教師が教育勅語の御精神は鼓吹したが、八釜敷暗記暗誦を強ひない学校もある」といった状況が、「近頃の如くに教育勅語の暗記暗写が訓示せられると、一般教育界は、又も無意味なる暗記暗写をやる事なきや」²⁸⁾と暗記暗写一辺倒になるのではないかと危惧を抱いていた。

『内外教育評論』5－6の論説は、「教育勅語及戊申詔書の取扱法如何」とテーマを掲げ、在大学院某文学士、文部省視学官の小西重直と小泉又一、慶應義塾大学教授稲垣末松らの意見を掲載した。暗記暗誦に反対の立場をとる某文学士は、反復練習は教育勅語のありがたみを薄れさせ、ついには何とも感じさせなくしてしまうとして、「機械的の読方を生徒に強いて勅語の御精神を吹込む」（13頁）やり方を批判している。小西重直は、無意味に暗記暗誦しただけでは効果はなく、義理を弁えたうえでの暗記暗誦でなければならない、

「勅語の御言葉に実際の行為を結付けるにしても、真に暗記暗誦が出来て居なければ駄目」（15頁）と述べた。小泉又一は、教育勅語及び戊申詔書を暗記暗誦させることについての世間の非難——「暗記暗誦は機械的であつて教育的効果が薄弱である。恰も僧侶が経文を誦するが如く無意味なものである」（16頁）あるいは「余り暗誦暗記をせしむる事は、至尊に近づき奉るやうで其れが為めに却て尊敬の念を薄くする虞あり」（17頁）に対して、それぞれ、「暗記暗誦と云ふ事は主でなくして、御精神を銘記し感佩して、大御心に答へ奉るのにあるのだから、暗記暗誦は其の方便として課したのである。乍併唯々御精神を了解したのみで暗記暗誦が出来ないと云ふ事は宜しくない、真に御精神を了解したならば暗記暗誦が出来る筈である……又暗記暗誦すると云ふ事に依て、其味が益々深くなり感じも強くなる」（16～17頁）、「御精神を伝える為には語勅に親しませねばならない。敬遠しては駄目である」（17頁）と述べている。また、「教育勅語の教授に就ては教育社界では従来色々の苦心をして居るが、其の苦心をして居る割に効果の伴はないのは、徒らに無意味の暗記暗誦をさせたり、乃至は余りに分析的に取扱ふやうな方法のみに依つたからであらう」（17～18頁）と従来の教授方法を批判している。稲垣末松は「暗記暗誦の必要大にあり」と題して「暗記暗誦せしめないで、是が実行を期せやうとするなどは、恰も種を蒔かんで実を得やうと同じ事である」（19頁）、「教育勅語及び戊申詔書は日本国民の生命である。して見れば夫れに就て傍ら即ち第二の副業として、読書習字をやらするも必要な事である」（20頁）と述べた。

小西・小泉・稲垣はいずれも、機械的な暗記暗誦ではなく、勅語の精神を理解して実行に結びつけるための暗記暗誦を主張している。これに対して木山は勅語精神理解のために暗記暗誦が必要とされる理由がわからないと繰り返し述べて、むしろ「余り無意味なる暗記暗誦をやらすと、学生生徒は之に慣れて、成程暗記もすれば暗誦もするが、極冷淡に無関係の態度をとりて之をやる様になると思ふ」（21頁）と自らの体験を下に反論した。

『内外教育評論』5－7で木山は、「教育勅語の強制的暗記教授は非」と題した社説をかかげ、前号で提示された暗記暗誦賛成論に対しての反論を繰り広げている。小泉と小西の解釈によれば暗記暗誦は勅語の内容理解を伴うものということであるが、小学校1、2年生には勅語の理解ができるはずがなく「小学生には教育勅語には御示しになつて居る諸道德の觀念が未だ無い」（7頁）。したがって、小泉らが示した解釈はかえって暗記暗誦否認の理由となるとしている。また、暗記暗誦にどれほどの教育的効果があるのか疑わしい、教育勅語の暗記暗誦と道德的成長との因果関係は明らかでないとしている。教育勅語はその趣旨を体得すればいいのであって、「何でも彼でも教育勅語とのみいひ、無理やりに之を諳記諳誦などなせると、勅語に対する尊嚴の念が自然的に起らぬ」（9頁）と述べた。木山は、勅語の趣旨を子どもたちに体得させるための具体的な方法として、「修身教授の際にでも、生徒が実際に感奮する様な教材を以て、聖旨の示し給ふ所の道德的情操を養して置けばよい。……莊嚴の式上で今迄多くの学校でやつて居る様に捧読すれば、実は自然に暗記が出来又常に難有く感ずるのである」（9頁）と述べ、修身教授や祝祭日等の儀式における「捧読」で十分であるとの考えを示した。

同誌上の論説は「教育勅語及戊申詔書の取扱法如何」というテーマを掲げて、海老名弾正、佐々木吉三郎、近角常観、吉田熊次らの意見を取りあげた。海老名弾正は「唯々諳記諳誦させるのみでは駄目であるから最も具体的に説き、生徒に体得せしめるやうにしなければ

ればならない」(15頁)と述べて、明治時代に即した新しい実例を引用すべきことや、勅語の言葉を現代的に広く解釈すべきことを主張している。佐々木吉三郎は「私の考では無論教育勅語などは、諳誦はさせたい、高等科なら諳写も出来るやうにしたいと思ふけれど、如何に文句は大事だと言へ、一字一句覚え違のないやうにすると云ふことにのみ腐心するより寧ろ御精神の有り難いことを心に感じて、行を慎しみ徳を積むと云ふ覚悟の方を、工夫して修養させる方が重い」(17頁)と述べて、勅語の暗記暗写に拘泥する必要はないという考えを示した。近角常観は、「諳記諳誦なども、必要であらうが唯々無暗に少年児童に強ひたのでは駄目」(18頁)と述べ、勅語の精神を実行に移すために教育者が信念を持つことが必要だと説いた。「唯々教育家は宗教的信念を有つやうに心掛けねばならない。さうすれば宗教宗教と口に出さなくとも、隠微の間に生徒に感化を与へるやうになる。故に勅語を教へるにしても単に型のみ色々授けても効果がない」(20頁)と主張している。吉田熊次は、「教授の一方法として、諳記諳誦せしむる事は無論必要であるが、勅語の御精神を児童に伝へ、児童をして十分にそれを体得せしめることが、窮極の目的であるから、其点に関して教師の側に特別の用意が存しなければならない」(20頁)として、教師側の勅語への深い理解と勅語の精神に対する固い信念の必要性を説いた。

『内外教育評論』5—8の論説は「教育勅語の強制的諳記教授の是非」と題して、三浦修吾と一教員の文章を載せた。三浦修吾は「心理を無視する勿れ」と題して、教育勅語の暗記暗誦は必要であるが、理解が進んで暗誦するというようなものでなければならぬと述べた。一教員の「滔々たる此弊風を悲む」と題する文章は、読者の寄稿である。彼がどこの教員であるかは明らかにされていない。一教員が勤めている学校の属する郡では教育勅語の暗記暗誦が強制されていた。しかし、尋常2年生を受け持っている一教員は、「彼等に之を諳誦せしむるの勇氣は、どう考へても出で申さず候」(16頁)と告白し、尋常1・2年生に暗記暗誦させることに反対の意見を述べている。また、教育勅語暗誦の問題点を、視学制度との関係で具体的に指摘している。県視学が6年高等生に対して教育勅語の内容を尋ねた際、「田舎の素朴従順なる生徒」は、視学の「いかめしき顔つき」に「異常の恐怖心」を抱いているのに、その人から勅語に関して詰問され追窮されて、「全身緊張して言語も明白なる能はず、大なる圧迫と恐怖とを以て之に對し居」ったという。このような苦しい経験の結果、子どもたちが勅語に対してどのような感情を抱くことになるだろうかと問題を投げかけている。あるいは、視学が勅語中の字句の解釈に関する質問を児童にする場合があるが、「かゝる質問は無定見の教育者をして益々其大精神を忘却せしめて枝葉の末に走ら」せ、その結果「幼き児童をして不当の重荷を負はしむること屢々有之候」(17頁)と指摘している。

これより早く、明治44年4月5日発行『教育時論』935号で、山本良吉は「勅語教授上の注意」として6点あげている。「勅語の暗記及暗写は生徒自然の熟達に任すべく、之を命令し又は其結果によりて成績上を定むる如きことあるべからず。……勅語の暗記不充分なるが為に成績点数不良なる如きことありては、多数の中には或は数学に対すると同一の感を抱くもの出づるなきを必せず、これ極めて勅語尊崇の念を害す」(9頁)、「勅語に對し常に生鮮の興味を抱かしむべし。……教師にして、もし單純に勅語の文句を背誦し之を暗写せしむるを以て能事たれりとなし、而して勅語には千言万語尽きざる意義あり、五年十年説くに従つて益深遠の原理を含むを忘るゝ時は、たまたま勅語教授の目的と正反對の

結果を生ずるなきを保せず」（9頁）と戒めている。また、明治45年2月25日発行『教育時論』967号「念教育勅語は非教育」で述べられているような、「今日我国の教育者中、教育勅語を念じつゝある者も、亦決して少しとすべからざるが如し、随つて彼等は、念教育勅語的教育を施しつゝあるが、此くの如きは今日の文部省の所謂教育にあらずして、教育勅語宗とも名付くべき一種の宗教々育となるべし」（32～33頁）という状況が現出したのも、暗記暗誦の普及によるのではないだろうか。

明治44年8月1日発行『教育界』10—11の社説「勅語暗誦問題」は、『内外教育評論』誌上の暗記暗誦をめぐる議論に触れて、「児童に取りても然迄難事にあらざるが故に、而して又若干の効力あるを認むるが故に、之を暗誦暗写せしむる方がせしめざるより勝れりといふのみ。勅語の御精神を貫徹せしむるには、他により以上有力なる方法も存することを知らざるべからず」（4頁）と暗記暗写主義に消極的賛成論をとっている。『内外教育評論』誌上の勅語暗記暗誦をめぐる議論は、同誌主筆木山熊次郎の死去（明治44年9月）により断たれ、また他の雑誌に引き継がれることもなかった。

大正時代にはいと、教育勅語の暗記暗誦問題は教育関係雑誌上にほとんど現れなくなる。明治44年に小泉又一が「勅語及び詔書の暗誦暗記が、我國民全体のものとなつて、甚麼山間僻地でもいろは歌を知らざる者なき如く之が普及して行く事を希望」²⁹⁾したように、明治40年から同44年にかけての教育勅語暗記暗誦の普及施策によって、勅語の文章が国民全体ではないにせよ児童生徒の間に浸透していったためであろう。しかし、勅語の暗記暗誦をめぐる議論がなくなったわけではない。大正6（1917）年出版『八大詔勅と小学教育』には、「暗誦につきては之を否定する議論もあれども、これは機械的暗誦を否定するのであるから、これ等の弊に陥らず、十分御趣旨を意識して暗誦せしめるやう注意すること」³⁰⁾としている。当時も教育勅語暗誦を否定する議論があったことがわかる。

また、学校現場からは勅語「奉読」に関して次のような批判が上がった。大正9（1920）年10月15日発行『教育時論』1278号岐阜県安八郡名森小学校訓導三輪善吉「毎朝の教育勅語奉読に就て」によれば、安八郡の小学校では毎朝第一時の始めに尋常1年から高等2年に至るまで各学級において教育勅語を「奉読」することになっていた。三輪の勤める名森小学校は当論説が書かれた2年後の大正11（1922）年4月現在で、尋常小学校に14学級745名、高等小学校に2学級97名の児童生徒が在籍していた³¹⁾。安八郡では規模の大きい小学校であった。三輪の報告によれば、16学級のそれぞれで毎朝教育勅語を「奉読」し、安八郡の全小学校でも同様なことがおこなわれていたことになる。このことについて三輪は「非常によい様だが私には甚だ以て感心出来ない」（15頁）とし、批判を展開している。教育勅語「奉読」に対して「毎日奉読すると有難味が少くなる」という批判が一方であったが、三輪の批判点は別のところにあった。学校側は「毎日奉読さへすれば其趣旨が徹底出来ると思つて」小学校1年生から「奉読」させようとしたが、当の子どもたちは教育勅語の読みも意味も理解できないのでついつい「奉読」中も横を向いてしまう、それに対して「勅語を奉読してゐるのに横向いてゐるのは何事だ」（16頁）と叱責がとんでくる。毎朝くり返すことは教育勅語の「奉読」を形式的にしやすいく、教育勅語の意味や読みのわからない低学年にとって勅語を毎朝「奉読」したり勅語に頭を下げることは、勅語を「何か知らん有難いもの」として偶像崇拜しか受け取られなくなりなぜそれが有り難いものか考えなくなってしまう、このような偶像崇拜を排すべきだ、というのが三輪の主張であった。

昭和5年出版『修身訓練の諸問題』で佐々木秀一は、「教育勅語の御精神徹底の方法如何の問題と関連して、その暗誦の問題が、一時喧しかつたことは、未だ読者の記憶に消えないところであらう」³²⁾と述べていることから、このころには暗記暗誦をめぐる議論は終息していたことが窺える。昭和9（1934）年出版『詔勅の聖訓と道德教育』で、亘理章三郎は「昔の教育法が機械的記誦に偏してゐたのに反動して、近來の教育法は機械的記誦を忌避するの傾が多いが、私は或る場合或る程度に於ては、却て之が合理的な教授法であると思ふ」³³⁾と述べている。明治40年代に勅語の暗記暗誦を肯定していた人々でさえ機械的な暗記暗誦については否定していたのは隔たりが見られる。昭和9年のころには、機械的暗記暗誦の肯定論が出るほど勅語の暗記暗誦が当たり前のことになっていたといえるかもしれない。

5. 暗記の対象学年

このようにして定着した勅語の暗記暗誦であるが、勅語を暗記すべきとされた時期（学年）は論者によって多少の違いがあった。

明治41年出版（明治37年初版）の小泉又一・乙竹岩造共編『小学校各教科教授法』（師範学校教育教科書）には、修身科の教授法として、尋常科中学年には「勅語の大意を平易に説き聴かして聖意のある所を感戴せしめんことを要す」とあり、高学年には「此の学年の終に於いては曩に漸次に授け来りたる勅語を総括して其の大意を知らしめ且つ全文を暗誦せしむべし」³⁴⁾とある。

明治41年、下伊那教育会が『信濃教育』261号（7月1日発行）に載せた「教育ニ関スル勅語ノ御趣旨ヲ普及セシムル方法」のうちの「児童在学中ニ於ケル勅語ノ取扱ヒ方」には、尋常科1，2年生においては勅語「拝聴」の作法と心得を授け、勅語なるものの説明をして、3，4年生においては勅語中の徳目を修身教科書と関連させて教授すること、また4年生においては読み方と大体の説明を授けること、5年生においては暗誦、6年生においては暗書と意義の了解に至らせることが掲げられている。

大正2年出版の田中廣吉『小学校に於ける實際的教授法』は、尋常1，2年生では勅語の趣旨と「拝聴」の心得や作法を授け、2年生では修身教科書を勅語と連絡させて教授し「勅語中にもかく仰せられて居ると説話して聖句を断片的に教授し諳記せしめ（勅語の御言葉そのまゝを提出するにあらず）漸次勅語に近接せしめるがよい」としている。3，4年生では修身教科書中の徳目を勅語との関連で教授し、4年生では教科書中の勅語で読み方と大意を授けることとしている。5，6年生では勅語の系統的な教授が求められている。「勅語全体は第五学年第二学期の中頃、則ち勅語下賜³⁷紀念日の前後に於て三、四時間を費して全篇の読解を授け、爾後度々之を誦読せしめて、諳誦する様に至らしめなければならない」として、6年生のおわりまでには暗誦せしめ、暗写にも熟達させなければならないとしている³⁵⁾。

大正2年5月15日発行『国民教育』4－5で、愛知県丹羽郡犬山南尋常小学校訓導清水武男は「教育勅語徹底法」と題して、勅語教授段階法をまとめている。それによると、1・2・3年生では、勅語とはなにか（これに対して用意された答えは「天皇陛下の仰せ」）、勅語にはどういうことがいってあるか（同「よい子になれ」）、勅語を聞くときの心得、などについて教授するようになっている。4年生になると教育勅語を読めるようにして、大意と字義を教授し、5・6年生では暗誦させることになっている。

大正6年出版『八大詔勅と小学教育』では、尋常科1・2年生に対しては儀式日前後に「拝聴」心得と作法を授けること、尋常科3・4年生に対しては修身科の際に勅語を板書してその読み方と意味を授け、例話や訓辞と結びつけて趣旨を知らしめること、尋常科5・6年生に対しては趣旨を一層徹底的に会得せしめること、6年生では全文を暗誦させること、としている³⁶⁾。

小原国芳は、昭和4年出版（大正10年初版）『修身教授の実際』で、「よく勅語を暗誦したり謹写さしたりすることがあるが、決して悪いことではない。四五学年頃から理解の出来ない時代に於ても無理のない限り少しは暗誦さして置けば、やがて長じて理解の出来る時の助けとはなる。しかし吾々が考へねばならぬことは程度の問題である。よく子供が暗誦してる学校が選奨学校の資格となつたり、無理に一二年頃から強ひたり、書取が出来ないとて徳育が全然地に墜ちて居るかの如く考へられては、甚しき偏見である」³⁷⁾と述べた。

佐々木秀一は、「暗誦は喧しい問題になつた割合に容易な仕事と思ふ。それも何日までには是非暗誦せよなどと云ふ圧迫的の態度でなく、自然に「こんどは誰が読めるか」と云つた風に発動的態度で以て、漸く全級を悉くす方法に依るが得策である」として、尋常科6年生でも暗誦・暗書ができるようにすべきとの考えを示している³⁸⁾。亘理章三郎は「勅語全文の誦読は、尋常第三学年の第二学期の初めから始め、其の学期半に当る勅語御下賜日と関係せしめてもよい」³⁹⁾と述べて、早い段階から暗記させることを提唱している。

以上のように勅語を暗記暗誦させる学年は、論者によって違いがあり、3年生から6年生まで幅があるが、5、6年生の段階での暗記を求める考えが多いようである。明治30年代の神奈川県や長野県で、尋常小学校4年生のうちに暗記することが求められていたのに比べると、遅くなっている。これは明治40年に小学校令が改正され、尋常小学校が四年制から六年制に延長されたことによるものであろう。つまり、尋常小学校を出るまでに勅語を暗記暗誦させなければならないという基本的な考えは同じであったが、義務教育年限が延長されたために、暗記すべき学年も上がったということではなかろうか。しかし、学校現場ではこうした理論上の学年より早くから暗記暗誦をさせていたことは、明治44年『内外教育評論』誌上の一教員の報告等にあった通りである。

おわりに

本稿で述べたことは、次のようにまとめられる。

明治23年教育勅語公布以後、教育者に対しては教育勅語を読み、その旨趣を実践に移して児童の模範となることが期待された。児童も教科書に載せられた教育勅語を読むことが期待されたが、実際には、学校の儀式のなかでの校長による「奉読」により勅語に接する機会をもつのがせいぜいであったようである。なかには校長が読むのを聞いているうちに暗記してしまう子どももいた。勅語の暗記をさせる学校はまだ少なかった。普及のために勅語の印刷物を配布することが行われたが、勅語を頻繁に読むことや暗誦すること、印刷物としての勅語が軽い扱いを受けることについて批判的な意見もあった。

明治30年代は教育勅語の普及貫徹が問題となったが、その議論の中で勅語の普及徹底がなされていない証左として児童生徒や師範学校の卒業生等が勅語を読めない、書けないという状況が指摘された。学校を基盤として国民全般に勅語の普及をはかるためには、学校儀式的校長による「奉読」のみでは不充分とされて、児童生徒に勅語を読ませる、さらには

暗記暗誦させるという方法が広がり始めた。明治30年代半ば以降、学齢人口の就学率が90%に達し、通学率も7割を超えるようになった。教育勅語の普及徹底について、こうした学校教育の普及に則った目に見える成果が期待されたといえよう。いっぽうで、教育勅語の意味を分からずに読んでも効果はないとする、のちに議論になる批判が早くも明治35年に久津見から出されていた。

明治40年の牧野文相下で、小学校児童をして勅語を暗記させる施策が採られ、明治43年には勅語を児童に浸透させるべく教科書の改訂がおこなわれた。また、明治43・44年に師範学校・中学校・高等女学校でも教育勅語暗記が義務づけられた。これらの施策は視学制度を通して学校現場に徹底された。明治末には義務教育の就学率が98%に達していたから、学校での暗記暗誦を通じた教育勅語普及策は大いに功を奏したと考えられる。

勅語の暗記暗誦が広まれば、これをめぐる議論も起きた。議論が、否定論対肯定論という単純な図式ではなく、肯定論者のなかからも児童生徒に暗記させる際の方法上の問題点が提出されるというものであったことは、この問題の根の深さを示すものであった。文部省官僚や学者が機械的な暗記暗誦を排して勅語の精神を子どもたちに体得させるための理念的な暗記暗誦を説いたのに対して、現場の校長・教師たちは学校の成績を上げるために児童生徒に勅語を暗記暗誦させることに懸命にならざるを得なかった。暗記否定論者の意見には、こうした理念と現実の乖離に対するいらだちが窺えた。

以上のような経緯を経て、大正期以降、小学校児童に勅語の暗記暗誦が浸透した。視学制度の影響もあってか、暗記暗誦教育にあたって明治・大正期のある時期、ひとつの県や郡のレベルで同じような方針がとられていた形跡がある。しかし、大正期後半以降長崎県内については、聞き取り調査結果によれば、学校における暗記暗誦教育が均質的になされたわけではないことは明らかである。教育勅語を「暗記させられる事も、した事もなかった」(1842長崎)⁴⁰⁾という児童もいた。暗記した児童にしてもその時期(学年)や方法はまちまちであった。教師からの体罰を受けながら苦勞して暗記した児童もいれば、誰から何も言われないまま自然に覚えたという児童も少なくない。「トイレに入ってボソボソとつぶやいて覚えた」(2560長崎)、「九九のように学校の帰り道に口ずさんでいた」(2167長崎)という児童もいれば、「九九などはトイレの中でも覚えろといわれていたが、教育勅語はそういう扱いをしてはいけなくて、自分の机の前で正座して覚えていた」(1941長崎)、「天皇のことばである教育勅語は、自由に言ったり子どもだけで口にすることもおそれおかつたため、休み時間や家で声に出して練習するものはおらず、声に出して練習するのは修身の時間だけだった」(2126長崎)という児童もいた。こうした児童の勅語経験の違いを規定したものが何だったのか、今後の検討課題とする。

註

- 1) 鈴木理恵「大正・昭和期の小学校と教育勅語」、『長崎大学教育学部教育科学研究報告』第55号、1998年。
- 2) 雑誌記事を探すにあたっては、教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』(日本図書センター)を利用した。教育勅語に関する雑誌記事の抄出は『教育勅語渙発関係資料集』第二巻、国民精神文化研究所、1940年、にもある。本文中に引用した雑誌記事文章中の傍点は省略し、旧字は新字にあらため、誤字等についてはそのままにした。引用部分の頁は、本文中の引用か所のあとに()を付して示した。

- 3) 中村紀久二「『教育勅語』下の子どもたち」、『法学セミナー』増刊、総合特集シリーズ12、教育と法と子どもたち、日本評論社、1980年、123頁。
- 4) 「教育勅語が残してくれたもの」、佐藤秀夫編『続・現代史資料』9（教育 御真影と教育勅語2）月報、みすず書房、1994年、2頁。
- 5) 佐藤秀夫「わが国小学校における祝日大祭日儀式の形成過程」、『教育学研究』30巻3号、1963年。
- 6) 海後宗臣編『日本教科書大系』近代編第3巻修身（三）、講談社、1962年、602頁。
- 7) 教学局編纂『教育に関する勅語渙発五十年記念資料展覧図録』、1941年、139頁
- 8) 「教育勅語渙発直後芳川文相教育意見書」、前掲註7）書、134頁。
- 9) 「奉勅ノ注意」、『教育報知』242号、3頁。
- 10) 「勅語の写真版」、『教育報知』245号、14～15頁。
- 11) 正宗白鳥「私の遺言状」、『文芸春秋』昭和34年5月号、294頁。
- 12) 山川均『ある凡人の記録』、岩波書店、1978年（1961年第1刷）、112頁。
- 13) 生方敏郎『明治大正見聞史』（中公文庫）、中央公論社、1978年、60～61頁。
- 14) 和辻哲郎『自叙傳の試み』、中央公論社、1979年（1961年初版）、183頁。
- 15) 明治26年5月10日「小学校実況諮問条項答申（石川県）」、佐藤秀夫編『続・現代史資料』8（教育御真影と教育勅語I）みすず書房、1994年、85頁。
- 16) 前掲註15）書、89頁。
- 17) 「勅語の旨趣を貫徹せしむる方法如何」、明治27年9月5日発行『教育時論』338号、11頁。
- 18) 長野県教育史刊行会編『長野県教育史』第6巻教育課程編3、1976年、555、556頁。
- 19) 茨城県教育会編『茨城県教育史』上巻、1958年、688、689頁。
- 20) 久津見蔵村『家庭教育子供のしつけ』、前川文栄閣、1902年（訂正増補三版、初版は1901年）、38頁。
- 21) 「教育勅語」、明治39年11月5日発行『教育時論』776号。
- 22) 「全国師範学校長会成績」、明治40年6月15日発行『教育時論』798号、27～28頁。
- 23) 小学校児童卒業後永く教育ニ関スル勅語ノ趣旨ヲ奉体実践セシムヘキ適當ノ方法ニ関スル師範学校長会議答申ノ旨趣貫徹取計方、明治40年9月16日、未発普343号、各地方庁、各高等師範学校へ文部省普通学務局通牒。
- 24) 亘理章三郎「第二回第三回文部省著作の小学修身書」、『詔勅の聖訓と道德教育』第九一四、明治図書、1934年。亘理は、本文中に示したような第一期と第二期の修身教科書の違いをまとめた上で、「第二回の修身書が、勅語中心の教訓書として一大発展であつた」（595頁）と述べている。
- 25) 佐々木秀一『修身訓練の諸問題』、明治図書、1930年、178頁。
- 26) 一教員「滔々たる此弊風を悲む」、明治44年8月1日発行『内外教育評論』5－8、17頁。
- 27) 「本題を研究する所以」、明治44年6月1日発行『内外教育評論』5－6、12頁。
- 28) 木山熊次郎「小泉稻垣両氏の教を乞う」、明治44年6月1日発行『内外教育評論』5－6、23、22頁。
- 29) 小泉又一「此覚悟と此決心あれ」、明治44年6月1日発行『内外教育評論』5－6、17頁。
- 30) 野澤正浩・守内喜一郎・三浦喜雄共編『八大詔勅と小学教育』、目黒書店、1917年、323頁。
- 31) 岐阜県教育会編『岐阜県教育五十年史』、岐阜県教育会、1923年、323頁。
- 32) 前掲註25）書、176頁。
- 33) 前掲註24）書、598頁。
- 34) 小泉又一・乙竹岩造共編『小学校各教科教授法』、大日本図書株式会社、1908年、24、26頁。
- 35) 田中廣吉『小学校に於ける實際の教授法』、廣文堂書店、1913年、29、30頁。
- 36) 前掲註30）書、312～323頁。
- 37) 小原国芳『修身教授の實際』上、集成社、1921年、144～145頁。
- 38) 前掲註25）書、184～185頁。
- 39) 前掲註33）に同じ。
- 40) （ ）内は、教育勅語に関する聞き取りレポートの整理番号。鈴木理恵「教育勅語暗記についての調査研究」、『長崎大学教育学部教育科学研究報告』第54号、1998年、註の11を参照。